

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集

館林市内遺跡発掘調査報告書
TATEBAYASHI—SHINAI

1990

館林市教育委員会

館林市埋藏文化財発掘調査報告書 第22集

館林市内遺跡発掘調査報告書
TATEBAYASHI—SHINAI

1990

館林市教育委員会

【 例 言 】

1. 本書は平成2年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教 育 長	堀 越 亘				
教 育 次 長	田 村 幹 男				
担当主管課	館林市教育委員会	文化振興課	文化財係		
文化振興課長	小 宮 稔 雄				
文化財係長	三 田 正 信				
主 事	川 島 孝 夫	(担 当)			
主 事	黒 沢 文 隆				
調査補助員	寺 内 景 子				
作 業 員	石 川 栄 吉	飯 島 富 子	近 藤 久 美 子		
	菅 沼 一 男	津 田 照 子	寺 内 義 正		
	中 井 貞 次	長 沢 作 次	林 正 行		
	松 本 末 吉				

3. 調査に伴う諸経費は、国及び県より補助金を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物・調査記録・資料は館林市教育委員会で保管した。
5. 本書の取りまとめは、川島、黒沢が中心となり行なった。
6. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関の御指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

目 次

例	言	1
	目次	2
図	版目次	2
写	真目次	3
第Ⅰ章	館林市の環境	4
第Ⅱ章	各遺跡の内容	8
第1節	館林城跡土塁	8
第2節	高根古墳群1号墳	12
第3節	中堤遺跡	18
第4節	屋敷添遺跡	21

図 版 目 次

第1図	館林市の地形と調査された遺跡	5
第2図	住居址の確認された遺跡と古墳	7
第3図	館林城跡土塁残存状況	8
第4図	＃ 周辺図	9
第5図	＃ 断面図	11
第6図	高根古墳周辺図	12
第7図	＃ トレンチ配置図	15
第8図	中堤遺跡周辺図	19
第9図	＃ トレンチ配置図	20
第10図	屋敷添遺跡周辺図	21
第11図	＃ トレンチ配置図	23

写真目次

写真 1	館林城跡土塁断面	10
写真 2	# 調査風景	10
写真 3	# 遠景	10
写真 4	高根古墳調査前風景	13
写真 5	# 調査風景	13
写真 6	# 1号トレンチ全景	14
写真 7	# 2号及び4号トレンチ全景	14
写真 8	# 1号及び3号トレンチ全景	14
写真 9	# 1号トレンチ	16
写真10	# 2号トレンチ	16
写真11	# 4号トレンチ	17
写真12	# 全景	17
写真13	中堤遺跡調査前風景	18
写真14	# 調査風景	18
写真15	# 重機調査風景	19
写真16	# トレンチ全景	20
写真17	屋敷添遺跡調査前風景	22
写真18	# 重機調査風景	22
写真19	# 調査風景	22
写真20	# 1号トレンチ溝状掘り込み	24
写真21	# 2号トレンチ遺物散布状況	24
写真22	# 3号トレンチ	24
写真23	# 1号トレンチ	25
写真24	# 2号トレンチ	25
写真25	# 4号トレンチ	25
写真26	# 調査地全景	25

第I章 館 林 市 の 環 境

位 置 と 地 形

館林市は、群馬県の南東部にあり、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約77,000人、総面積60 Km²余りの都市である。市域は東西15 Km、南北8 Kmと東西に長く、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊水池で茨城県に、南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県に、西は邑楽郡邑楽町とそれぞれ接している。また、県都前橋市まで約50 Km、首都東京までは東武鉄道伊勢崎線で浅草まで約65 Km、東北自動車道では館林インターから都心まで60 Km余りと、首都圏との結び付きも強い。

次に地形的に本市を概観すると、洪積地（洪積台地・内陸古砂丘）と沖積地（自然堤防・沖積低地・湿地・池沼・河川等）に大別される。

本市中央部を東西の帯状に延びる台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市の高林から大泉町、邑楽町を経て館林市に達し、更に東の板倉町へと続く洪積台地で、本市における標高はおよそ18 m～25 mである。その構成をみると、河川の堆積物とされる礫、砂、シルトの互層の上に、中部ローム及び上部ロームの2層が埋積しており、形成時期は下末吉海進時に遡るとされている。

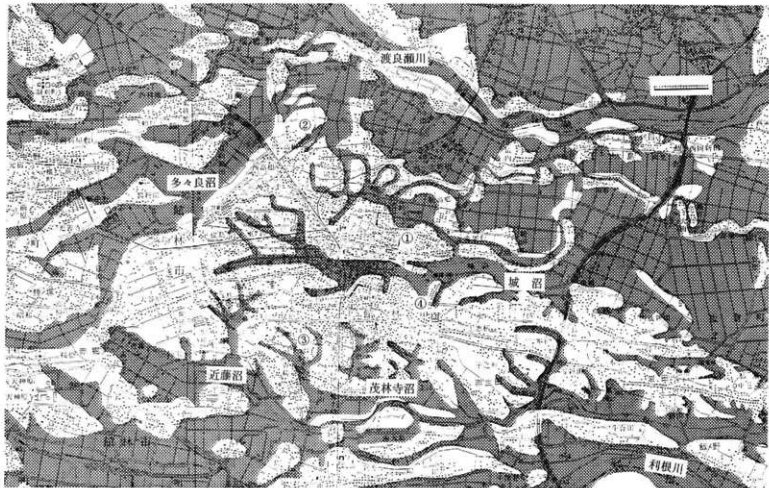
また、この台地の西側から北側の縁に沿って、埋没河群砂丘（内陸古砂丘）が連なっている。幅約200 m、洪積台地からの比高は5 m前後で、大泉町古海から本市の高根に至る約13 Kmにわたっており、本市の最高点はこの埋没河群砂丘上にある。形成時期については、やはり下末吉海進時からその後の海退の時期に遡るといわれ、内陸部におけるわが国最古のものである。

そして、この「邑楽・館林台地」を取り囲むように、利根川及び渡良瀬川の氾濫原である標高14 m～16 m 前後の沖積地が広がっている。この沖積地を区分すると、北部の渡良瀬川沿岸地帯、南部の利根川沿岸地帯の2地帯に分けることができる。この沖積地の中には大小の旧河道が残り、この旧河道に沿うように自然堤防が発達している。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向けて緩く傾斜し、台地面と低地面との比高差も北部で大きく南部では小さいという傾向にあり、これは、埼玉県の北東部に中心を持つ関東造盆地運動の影響によるものと考えられる。

洪積台地はまた、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。その中でも市内最大の谷は鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分し、更に浅い谷が延びている。こうした洪積台地を開析する谷には、ほかに茂林寺沼、蛇沼等の池沼とこれに伴う湿地が形成されており、本市の景観上の特徴となっている。

第1図 館林市の地形と調査された遺跡



① 館林城跡土塁

② 高根古墳群1号墳

③ 中堤遺跡

④ 屋敷添遺跡

時代別遺跡の状況

館林市内における遺跡の分布調査は、昭和13年に「上毛古墳総覧」としてまとめられた調査をはじめ、昭和38年刊行の「群馬県の遺跡」、昭和46年刊行の「群馬県遺跡台帳」、更に昭和63年に「館林市の遺跡」として刊行された市内遺跡詳細分布調査の計4回である。「上毛古墳総覧」は、昭和10年に実施された県下一斉の古墳の調査結果をまとめたもので、合併前の多々良村の59基を筆頭に、現在の館林市域に67基の古墳のあったことが記録されている。「群馬県の遺跡」では、昭和36年から37年にかけて調査が行なわれ、縄文の24遺跡をはじめ市内42の遺跡が掲載された。「群馬県遺跡台帳」は、昭和45年・46年に実施された調査を基に作成され、縄文の18遺跡、縄文・古墳の6遺跡など46の遺跡が報告されている。また、昭和58年から昭和63年にかけて実施された最新の調査結果である「館林市の遺跡」には、144カ所の遺跡が推定され、内訳は、旧石器時代－3、縄文時代－13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代－0、古墳時代から平安時代を含むもの－96（うち縄文時代の遺物散布の見られるもの23）、古墳－17（延べ25基、推定を含む）、中世生産址（多々良沼遺跡）－1、中世城館址－12（伝承地を含む）、近世城館址－2となっている。

次に、「館林市の遺跡」を基に、各時代ごとの遺跡の分布状況を概観すると、旧石器時代の3遺跡は、内陸古砂丘及び洪積台地に分布している。

縄文時代では、後・晩期の遺跡数が少なく、立地は前・中期が台地上の平坦面に多く、後・晩期になると台地斜面から微高地となっている。

弥生時代の遺跡は本市では0となっている。しかし、昭和46年に調査された赤生田道溝遺跡は、立地の特徴を明確にはできないものの、弥生から古墳時代への移行期のものと考えられている。

古墳時代の遺跡は、前期が台地斜面から微高地、中期が斜面から台地上、後期は台地上という傾向がみられ、古墳はすべて低地を見下ろす台地上に造られている。

奈良時代になると、遺跡の立地は台地上の縁辺から台地内部へと広がりが見られ、平安時代では、遺跡数も急増し、立地は台地内部から、舌状台地、自然堤防上にも分布が見られて来る。

中世では遺物の散布のみで遺跡として捉えることのできるものが少なく、位置の確認できる城館伝承地が12カ所である。近世に入ると、館林城跡、近藤陣屋跡がある。

これらのことから窺える遺跡分布上の一つの特徴として、縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代の初期にかけて遺跡数の少ないことを挙げることができる。

また、市内遺跡詳細分布調査は、マッピングされた遺物散布地に、その立地条件を加味し遺跡としての可能性を推定したもので、遺跡として確定するには発掘調査の結果に拠らねばならない。

第2図 住居址の確認された遺跡と古墳



- | | | | | | |
|---------|--------|----------|------------|------------|-------------|
| 古墳 | ⑤町谷1号墳 | ⑩中新田古墳 | ⑮高根稲荷大明神古墳 | ⑳大袋1遺跡 | ㉑南近藤遺跡 |
| ①愛宕神社古墳 | ⑥町谷2号墳 | ⑪南古墳 | ⑯高根古墳群 | ㉒道溝遺跡 | ㉓伝右工門遺跡 |
| ②山王山古墳 | ⑦富士山古墳 | ⑫菅原神社古墳 | ⑰日向古墳群 | ㉔間堀遺跡 | ㉕高根・外和田遺跡 |
| ③当郷新田古墳 | ⑧子ノ神古墳 | ⑬上三林古墳 | ⑱住居址 | ㉖下堀工道溝遺跡 | ㉗岡野・屋敷前・岡遺跡 |
| ④下志柄古墳 | ⑨岡ノ上古墳 | ⑭富士嶽神社古墳 | ㉘尾曳町1遺跡 | ㉙北近藤第1地点遺跡 | ㉚八方遺跡 |

第Ⅱ章 各 遺 跡 の 内 容

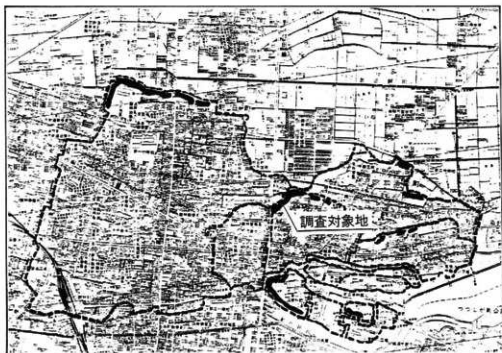
第1節 館林城跡土塁(たてばやしじょうせきどるい)

館 林 城 の 概 要

館林城は、邑楽・館林台地を開析する鶴生田川から城沼に続く低地の北岸、城沼に突き出した舌状台地上に築かれた平城である。この台地の周囲には、本市景観の特徴の一つである池沼やこれに伴う湿地が広がり、これらの自然環境を巧みに利用した天然の要塞、難攻不落の城としてその堅固さを誇っていた。

築城の時期については諸説あり明らかではないが、関東管領上杉顕定の感状や、尾島町世良田の長楽寺の僧松陰の著した「松陰私語」の中に館林城攻略の記述が見え、15世紀後半には「館林城」と呼ばれる武装施設の存在していたことがわかる。

館林城の歴史は大きく中世戦国時代と近世とに分けることができる。中世については、築城の時期も含めてははっきりしない点が多いが、伝説に従えば戦国時代の動乱の中で台頭して来た赤井氏から、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原征伐まで赤井氏、足利長尾氏、北



第3図 館林城跡土塁残存状況

条氏へと城主は移って行った。戦国時代の館林は、上杉氏、北条氏といった有力戦国大名の勢力争いの中で、その位置は流動的であった。

北条氏の滅亡以後、徳川家康の関東入国に伴う榊原康政の館林入城より近世の館林城は始まる。康政は江戸を守る北辺の要所として館林に配され、城郭の拡張、城下町の整備等を行い近世館林城の基礎を築いた。榊原氏以降中断を経ながらも、城主は、松平（大給）氏、徳川氏、松平（越智）氏、太田氏、井上氏、秋元氏へと移り、7家17代の居城として、当地方の政治、経済、文化の中核をなした。またこの間、城郭も変遷し、徳川綱吉の入封に伴う大改修、その後の破城、松平（越智）清武による再築などがある。工事の内容についてはいずれも明らかとはなっていないが、明治維新後間もない明治7年の大火で主要部の大半を焼失した館林城は、清武以降整備されたものと思われる。

調査の概要

館林城跡土塁の調査は、地権者相澤君子氏の館林市城町674-2における個人開発に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、市内の巡回により城町674-2地内の開発計画を確認し、ただちにその取り扱いについて原因者との協議を開始した。

館林城跡は、その殆どが市街地となっているため、城郭としての遺構はほぼ失われている。しかし今回の開発予定地には、館林城総郭の北辺の一部を成し、ほぼ東西に延びていたと考えられる土塁が残っていた。現状では、土塁を南北に断ち切るように主要地方道佐野行田線が走っており、開発地内はその全面が竹林となっていた。しかし、伐採後、土塁の残存状況は、形状において往時の姿を偲ばせる比較的良好な状況が窺われたが、内部構造については、竹根等による攪乱が予想され、露頭し



第4図 館林城跡土塁周辺図

ていた断面も風化が進んでいた。既往調査としては、平成元年度の本丸調査に伴い一部残存していた土塁が調査されたが、総郭における既往調査の例はなく、構築状況の把握など調査が必要と判断され、調査を実施することで合意された。

調査は、露頭断面の精査を行ない、形状、内部構造の把握を目的に行なわれた。その結果、規模は幅約12m、高さ約3.6mで、形状は、城外に面する北側斜面と城内に面する南側斜面とでは、傾斜に違いが見られ、南側で緩く北側では急な状況が読み取れた。また、断面土層では、随所に風化、竹根等による攪乱が見られたが、粘性のある黒褐色系土、黒褐色系土と砂との混合、黒褐色系土にローム粒子の混合、ローム土等を交互に丹念に築き上げて行った版築状の構造が窺われた。内部は、層の厚さにより大きく上部、中部、下部の三つに分けることができ、上部及び下部では1層が10cm～15cm前後と比較的厚く、中部においては5cm程の土層もあり、緻密で丁寧な造りとなっていた。全体として、本丸に残された土塁同様計画的に築き上げられていった状況が確認された。

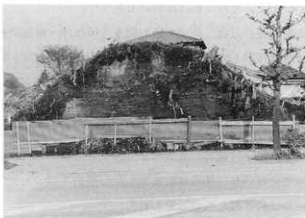


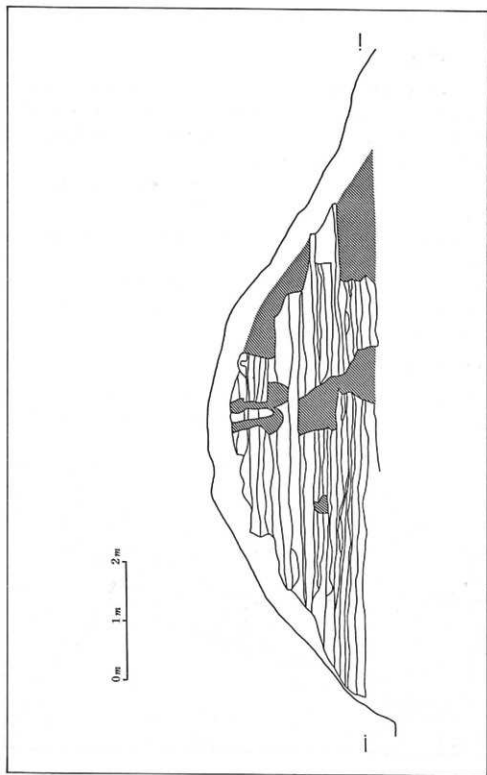
写真1 館林城跡土塁断面



写真2 館林城跡土塁調査風景



写真3 館林城跡土塁遠景



第5图 馆林城遗址断面图

第2節 高根古墳群1号墳（たかねこふんぐんいちごうふん）

立地と環境

高根古墳群は、日向古墳群とともに市内に残された古墳群の一つで、「館林市の遺跡」には、5基の古墳が掲載されている。地形的には、市内北西部をほぼ東西に延びる前述の内陸古砂丘の東部に位置し、「上毛古墳総覧」によれば、一帯には30基程の古墳の記載があり、内陸古砂丘を中心に古墳群を形成していたものと思われる。

付近には、古墳時代のものに比定され住居址の確認された高根外和田遺跡をはじめ、古墳から平安時代へかけての埋蔵文化財包蔵地である大道北遺跡、奈良から平安時代の包蔵地である新倉前遺跡、縄文式土器及び土師器の散布が見られる梅木山遺跡、また中世城館の伝承地である高根城跡がある。

調査対象となった古墳（ここでは1号墳とする）は、県道足利館林線の東側100m程の所にあり、内陸古砂丘上の兩側斜面に築造されていた。墳丘は現状において大きな削平等を受けた様子は見られなかった。

館林市内の古墳

館林市内における古墳の分布状況を見ると、「館林市の遺跡」では、推定も含め17カ所25基（日向古墳群5基、高根古墳群5基）が確認されており、前述のとおりいずれも低地を見下ろす台地上に築かれている。

また、市内において発掘調査の実施された古墳には、昭和37年、館林市誌編纂に伴い群馬大



第6図 高根古墳周辺図

学が調査を行なった天神二子古墳がある。この古墳は、今回調査を実施した高根古墳群1号墳の北東200m程の所にあった全長45mの前方後円墳で、主体部には粘土礫を持ち、埴輪列のあったことが確認されている。昭和60年には、城沼の北岸、市の指定史跡となっている全長47m、前方後円の墳丘を持つ山王山古墳の周濠調査が行なわれた。これは古墳の整備に伴うものであった。更に、昭和63年には、谷田川の北岸、東北自動車道館林インターの南東800mの所にある湧ノ上古墳の調査が行なわれた。これは、地元羽附旭町の区民公園建設に伴うもので、直径30m程の円墳と推定されたこの古墳からは、多数の埴輪片のほか、主体部として胴張型の横穴式石室が検出され、副葬品では、直刀、耳環、鉄鏃、鉄製馬具等が出土した。

調査の概要

高根古墳群1号墳の調査は、遺跡の範囲確認を目的に行なわれた。これは地権者関根喜八郎・久子両氏の個人住宅建設予定地館林市高根町130-3他2筆が、「館林市の遺跡」に記載された古墳の隣接地となっていたためである。

館林市教育委員会では、開発予定地における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始し、現地確認を行なった。

墳丘及び開発予定地の周辺では、大きな土地改変を受けた様子は見られず、トレンチによる古墳の範囲確認を行なうことが望ましいと判断され、確認調査を実施することで合意された。

調査対象となった1号墳の規模は、現況で直径約20m、高さは前述のとおり当古墳が内陸古砂丘の斜面に築造されていることから、南側と北側とは違いが見られ、南側斜面の立ち上がりから約3.5m、北側からは約1.5mあり、形状は円墳であることが



写真4 高根古墳調査前風景



写真5 高根古墳調査風景

窺われた。調査は、開発が直接墳丘にかかるものではないため、古墳を中心に墳裾から南側へ開発予定地に向け2m幅で4本のトレンチを掘り、周溝等遺構の把握を試みた。先ず1号トレンチにより、墳丘から開発予定地までの間の遺構の存否について調査を進めた。

その結果、墳頂より13mから15m程の所に幅約2mの溝状の掘り込みが見られ、これを別の地点から確認するため2号以下のトレンチを設定した。3号トレンチでは竹根等の攪乱により遺構と思われるものは確認されなかったが、2号及び4号トレンチでは、表土よりの深さ約1.5mの所に、1号トレンチのものに連続すると思われる同様の掘り込みが見られた。いずれも当古墳に付随する周溝の一部と推定されるが、今後、追調査を待ち、周溝と判断したい。

遺物としては、覆土中より縄文式土器片、埴輪片、土師質土器片等が出土した。

また、1号、2号及び4号トレンチの周溝と推定された部分の表土付近からは、レンズ状に堆積した火山灰層が検出され、新井房夫群馬大学教授へ鑑定を依頼した結果、18世紀後半に降灰した浅間A降下軽石層であることが確認された。



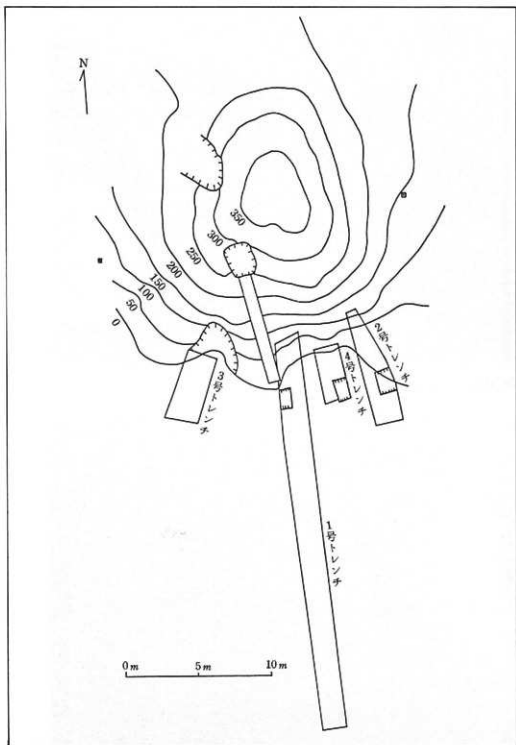
写真6 高根古墳1号トレンチ全景



写真7 高根古墳2号及び4号トレンチ全景
(左から)



写真8 高根古墳1号及び3号トレンチ全景
(左から)



第7図 高根古墳トレンチ配置図



写真9 高根古墳1号トレンチ



写真10 高根古墳2号トレンチ

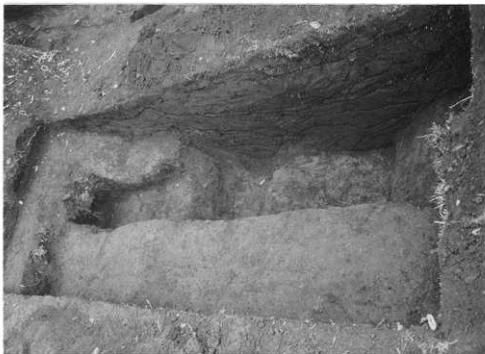


写真 11 高根古墳 4号トレンチ



写真 12 高根古墳全景

第3節 中堤遺跡(なかつつみいせき)

立地と環境

中堤遺跡は、本市の南部、旧東沼から北方へ邑楽・館林台地を開析する3本の谷のうち、中央の谷の東側に広がる遺跡で、「館林市の遺跡」には、平安時代の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。周辺は、国道122号線沿いの宅地化の進んでいる地域で、東沼も現在は埋め立てられ、分福町となっている。また付近には、これらの谷の周辺に、中島遺跡、清水橋遺跡、青柳中島遺跡、萩原遺跡など平安時代を中心とした遺跡が分布するほか、城館伝承地として中世の青柳城跡が更に南に広がり、西には近世の近藤陣屋跡がある。既往の発掘調査では、青柳城跡と中島遺跡の調査が行なわれている。

その中で開発予定地は、国道122号線と主要地方道佐野行田線の分岐点の西側にあり、隣接地も含め畑地ではあったが、周辺の宅地化の進行は著しい。

調査の概要

中堤遺跡の調査は、地権者武井茂氏の館林市大字青柳字中堤1448-4における個人開発に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、開発者より館林市農業委員会へ提出された農地転用届の合議を受け、協議を開始し現地確認を行なった。

開発予定地では遺物の散布は見られなかったものの、隣接地では散布が見られ、また、同遺跡における既往の発掘調査例がないことも考え合わせ、土地改変の有無など地下の状況把握が望ましいと判断された。以上のことから事前の確認調査を実施し、遺構が検出された場合再協議を行なうことで合意された。



写真13 中堤遺跡調査前風景



写真14 中堤遺跡調査風景

調査は、開発予定地内に幅2mのトレンチ2本を設定し、重機による掘り下げから開始した。1号トレンチではその掘削後、遺構確認のため南側にサブトレンチの掘り下げを行なった。この結果、表土下40cm程の所で水分を多量に含んだローム土に達したが、遺構に結びつくと思われる土層の変化等は確認されなかった。また、周辺が谷へ向かって緩やかに傾斜している地形のなかで、ローム面は水平に近く、この面を削平する何らかの土地改変があったと考えられる。遺物としては、若干の縄文式土器片、土師器片、須恵器片が出土したが、いずれも特筆されるものではない。



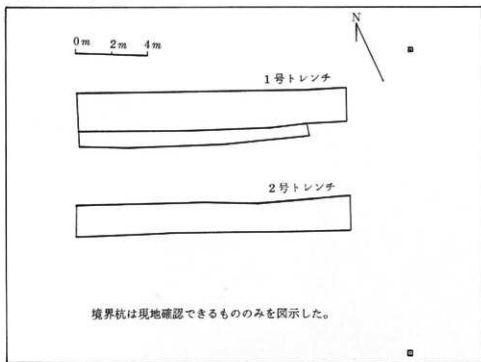
第8図
中堤遺跡周辺図



写真15
中堤遺跡重機調査風景



写真16 中堤遺跡トレンチ全景



第9図 中堤遺跡トレンチ配置図

第4節 屋敷添遺跡（やしきぞえいせき）

立地と環境

屋敷添遺跡は、本市の中央部、城沼の西岸に沿う台地上に位置する遺跡で、北西から南東へ向かって広がっている。周辺は、市街地としてはほぼ宅地化されており、かつてこの遺跡が面していたと思われる城沼の一部は埋め立てられ、体育館など総合運動場となり、往時の面影は留めていない。

昭和63年に刊行された「館林市の遺跡」では、縄文及び奈良から平安時代へかけての宅地化された埋蔵文化財包蔵地として掲載されているが、昭和38年刊行の「群馬県の遺跡」にも、縄文時代早期及び前期の遺跡として載せられ、既に「ほとんど壊滅している」という記述が見える。

城沼を取り巻く台地の縁辺には、屋敷添遺跡をはじめ数多くの埋蔵文化財包蔵地が分布している。「館林市の遺跡」では、城沼東岸に当郷遺跡ほか1遺跡、西岸には屋敷添遺跡、南岸では大袋Ⅰ及びⅡ遺跡ほか9遺跡、北岸では尾曳町1及び2遺跡ほか2遺跡が挙げられるほか、古墳は北岸の山王山古墳をはじめ、南岸の富士山古墳ほか3基の古墳が掲載され、城館址では館林城跡ほか4カ所が点在している。

このように、城沼周辺の遺跡は縄文時代から近世まで時代が長期にわたるなど、同沼が古くから人間生活に深く関わっていたことを示唆しており、本市の歴史性を考える上で欠かせない地域である。

調査の概要

屋敷添遺跡の調査は、地権者瀬山松三郎氏の館林市松原312-2ほか4筆における一般開発に伴う事前確認調査であった。



第10図 屋敷添遺跡周辺図

館林市教育委員会では、地権者より開発に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行なうこととした。

現地は、周辺がほぼ宅地化されたなかであって山林として残り、地形も台地から低地へと向かう斜面上に立地し、遺構の存否等、その確認を目的とした調査を実施することが望ましいと判断され、再協議の結果トレンチ調査を実施することで了解された。

調査地は全体に東へ向かって落ち込む傾斜地となっており、先ずこの傾斜に直交させる形で、東西に幅2.5m長さ60m余りの1号トレンチを設定し、更に傾斜に平行させ、1号トレンチと交差するように幅2mの2号以下3本のトレンチを南北に設定した。調査は、重機による掘り下げから開始した。

その結果、調査地の西域をほぼ南北に縦断するように幅約2m、深さ同じく2m程の溝状の掘り込みが検出された。この溝状の掘り込みは、4号トレンチの北端にその一部がかかり、更に1号トレンチの中央部やや西寄りのところを斜めに横切っていた。断面土層を見ると、ソフトローム及び黒色ローム層から更に下のハードローム層にまで深く掘り込ん



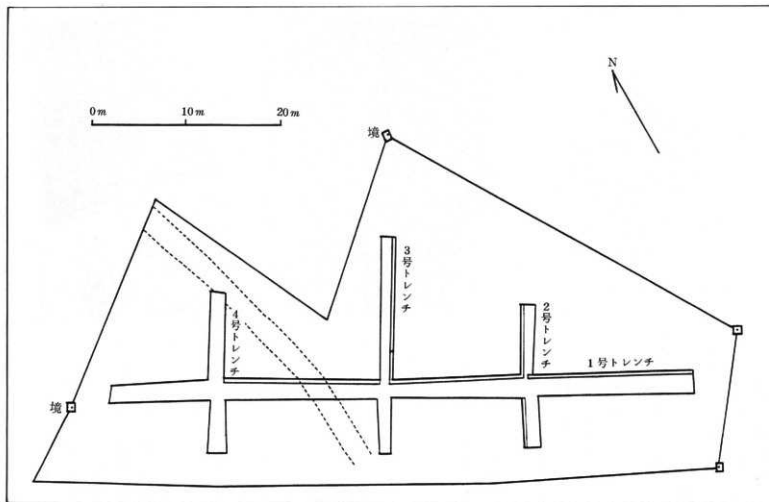
写真 17 屋敷添遺跡調査前風景



写真 18 屋敷添遺跡重機調査風景



写真 19 屋敷添遺跡調査風景



第 11 図 屋敷添遺跡トレンチ配置図

しており、底面は箱掘様となっていた。調査地におけるこの掘り込みの位置は、地表面の状況からほぼ推定することができた。

遺物としては、2号トレンチ及び2号と1号トレンチの交差付近より縄文時代前期の黒浜式のものに比定される土器片の散布が見られた。このため、サブトレンチの掘り下げ等により付近の精査を行なったが、遺構に結びつくと思われる土層の変化等は確認されなかった。このほか、磨製石斧等数点の石器の出土が見られた。

また、地下の状況については、ローム面までの覆土が東西の両端付近では50cm程なのに対し、中央部では170cmにまで達する部分があり、地表面とローム面では傾斜に違いが見られた。更に、この覆土が厚く堆積した部分の表土付近からは火山灰層が検出され、新井房夫群馬大学教授へ鑑定を依頼した結果、火山灰は12世紀初頭に降灰した浅間Bであることが確認された。このような状況から、調査地には溝状遺構掘削をはじめ、東側と西側では中央部に見られた浅間B降下スコリア・軽石層を含む削平が考えられるなど土地改変があったことが窺われた。



写真20 屋敷添遺跡 1号トレンチ溝状掘り込み



写真21 屋敷添遺跡 2号トレンチ遺物散布状況



写真22 屋敷添遺跡 3号トレンチ



写真 23 屋敷添遺跡 1号トレンチ



写真 24 屋敷添遺跡 2号トレンチ



写真 25 屋敷添遺跡 4号トレンチ



写真 26 屋敷添遺跡調査地全景

【参 考 文 献】

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 館林市教育委員会 | 「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集～第21集」 |
| 館林市教育委員会 | 「茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集」 |
| 館林市教育委員会 | 「近世館林藩の大名」 |
| 館 林 市 | 「館林市誌 歴史篇」 |
| 館 林 市 | 「館林市誌 自然篇」 |
| 群馬県教育委員会 | 「群馬県の遺跡」 |
| 群馬県教育委員会 | 「群馬県遺跡台帳」 |
| 板 倉 町 | 「板倉町史」 |
| 大 泉 町 | 「大泉町誌」 |
| 群 馬 県 林 務 部 | 「群馬県の貴重な自然 地形・地質編」 |
| 群 馬 県 | 「群馬県史 資料編5」 |
| 群 馬 県 | 「上毛古墳総覧」 |

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 オーラ印刷有限公司

発行年月日 平成3年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおもう